

今からおよそ二千五百年前、インド北方の一小国に、ゴータマ・シッダールタという王子がいた。他人からは羨望される身として生活しながら、青年期に人生を問い、自他を比べて妬んだり蔑んだり争ったりという人間の姿、また自分自身の生まれ・老い・病み・死は世俗の権力や財産や知識技能などによっては解決し得ないことを見抜いて、深く苦悩することとなった。そういう人間としての自己が真の人間として生きる道を求めて、王子という地位も財産も家族さえも捨てて出家して、ゴータマは、諸師に学び、心身の厳しいトレーニングをして、ついに真理を覚りブッダとして立ち上がるに至った。これを「成道」という。三十五歳であった。以来四十五年間にわたり、広範に歩き回って、出会った人々、教えを求める人々に語り続けた。それは人生の最後の日まで続けられた。

その方は、釈迦族出身の聖者で世にも尊い方の意味で「釈迦牟尼世尊」と、略して「釈尊」と呼ばれることとなった。釈尊は、人間の事実や世の真相を正しく観察され、私たちが真実を見抜く眼を持たず、自分中心の思い込みや自分の都合を満たそうとの欲求によって考え話し行動することから出られないで、闇雲にもがき、なお迷いを深くすると示されている。その上で、話す相手の課題に応じて、その人自身が課題と向き合って自ら気づくよう促し、新しい歩みが始まるよう導き、具体的な生き方を示された。多くの人が、釈尊に教えを請い、また説法のために身を運んだ。様々な経典が「如是我聞（私はこのように聞きました）」の語で始まるのは、その説法の場合において感動とともに領かれた言葉が伝承されているのである。

しかし、その釈尊の人生にも限りはある。八十歳という限界とも言える老齢の身体で、最後の旅に出、命終わる直前まで、一人ひとりに教えを説いた。クシナガラので、人々は、釈尊亡き後、自分は何をたよりに生きていけばよいのか、苦悩にどう立ち向かえばよいのか心配するモノもった。そういう思いを代表して、二十年以上そばでお世話をし、一番多く教えに接した、「多聞第一」と呼ばれるアーナンダが問い、それに対する答えは次の通りであった。「あらゆるものはうつろいやすい。怠らず励め。これからは自らを灯明とし、自らをたよりにして、他のものをたよってはならぬ。また法を灯明とし、法をたよりにして、他のものをたよってはならぬ」。

たよるべき第一は自己自身である。しかしその自己を、たよるに足る自己と自分で育てているか。自分を本当に見つめているか。自分を本当に大事にしているか。単なる自己中心のわがままでなく、自己の中にある真の欲求（本当に実現したいこと）は何なのか。気づいてみると、今まで親をはじめ周りの様々な方々に大切にしてもらいながら、実のところ自分を一番粗末にしていたのは、自分自身ではないのか。

そして、さまざまな情報の洪水の中で振り回されているだけで、真にたよるべき道理・教えに出会っていないのではないか。「偽」を「真」と見たり、「仮」にたよったりしながら、そのことに気づくことはありません。本当に安心して立脚できる大地はどこにあるのか。「無明」と言い表される私たち凡夫の知恵によるのでなく、釈尊の言葉（経典）とそれ感動して確かな人生の歩みを進めた歴代の「真に生きた人」が、それぞれの時代状況の中で表現された、さまざまな言葉を手がかりに、真実を求め続けなければなりません。自らをしっかりと生き、与えられた環境の中で周りの人を生かす人となり、そうあり続けるために、この深い闇のような社会の中で、自らを灯明とし、法を灯明とする歩みをつかりと歩んでいきたいものです。